

令和元年6月27日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2016～2018

課題番号：16KT0008

研究課題名(和文)福祉レジームと移民レジームの交差：外国人介護従事者が及ぼす影響

研究課題名(英文) intersection of welfare regime and migration regime: the effect of migrant care workers in welfare for elderly

研究代表者

安里 和晃 (asato, wako)

京都大学・文学研究科・特定准教授

研究者番号：00465957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は福祉レジーム論と移民レジームとの交錯についてアジア諸国を事例として検討した。高齢化は外国人労働者の取り込みを促進した。アジアの福祉レジームは分岐しつつある。それは家事労働者を基調とする自由主義的家族主義と、高度人材としての介護福祉士を基調とした介護の社会化した日本である。前者は再分配なき市場調達の原理で途上国女性を家族補完のケア従事者として補完する。資格要件は低い。後者は資格要件が高く看護師が多く導入され介護に従事する。資格要件の高さが外国人材の割合を低くする。近年の相次ぐ制度変更は資格要件の政治妥協の産物である。以上は学会、国際会議、論文などで報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢化がアジア共通の課題となる中で、域内移動を通じてケアの補填が行われている。高齢化は高齢者ケアのあり方を1つに収束させるのではなくそのあり方を多岐化させている。自由主義的な家族主義は外国人家事労働者の雇用を容易にさせ、東アジアだけでも100万人近く存在する。日本は逆に資格要件をクリアするため看護師のリクルートが多い。施設介護は看護師が、在宅は無資格の家事労働者がという構図を見て取れるが、必ずしもケアの質を問う受け入れではない。また、人口構成が大きく変化する中、移動のあり方の持続性が問われており、アジア地域における移住労働の標準化や調和化が不在だ。地域的(マルチラテラル)な調整が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the research project is to clarify the intersection how welfare regime intermingles with migration regime in Asia. The rapid ageing in Asia has surely become the driving force of migration from neighboring countries. However, welfare regime has become divergent; namely liberal familialism such as Singapore and insurance based socialized system such as Japan.

The former incorporate huge number of non-skilled female foreign workers with minimum or none skills and knowledge requirement. Cost of care is paid by family members in relatively cheaper price through the employment of migrant workers. Furthermore, employment tax can be a source of revenue for governments, opposite of budget spending welfare state, which can be termed quasi-welfare. The latter is quite opposite. Small number of qualified migrant workers, usually nurses even with the cost of deskilling are recruited. Pressure of lowering the qualification has been discussed and migration channel become complex.

研究分野：移民政策論

キーワード：福祉レジーム 介護 家族主義 家事労働者 経済連携協定 特定技能 フィリピン

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高齢化によるケア需要の増大とケア供給の確保は、アジアの多くの国々で共通する 21 世紀の重要課題の 1 つである。しかし、高齢化率、疾病構造、所得、民族、ケアの担い手などは国により多様である。また移民政策も各国で異なり、日本ではケアの社会化・専門化を進めたため、介護職員の 1%未滿しか占めないが、シンガポールでは介護職員の 90%が外国人である。

ところが移民の存在を福祉レジームではどう捉えるかという研究は、移民と高齢者ケアを学際的に扱う研究自体がまだ少なく、したがって政策的提言もなされていないことを考慮すると、その意義はきわめて大きい。ILO、OECD、WHO などはこの課題に部分的に取り組んではいるが、その焦点は家事労働者の人権問題や看護師の移動であり、体系的な調査が行われているわけではない。

ところが高齢者ケアをめぐる移動は東アジア諸国だけで 100 万人に近づいており、送出国のケア人材収奪によって成立するような受入国の高齢者ケアは持続可能であるとは言えない。国家を超えた適切なマネジメントの構築が求められているのである。

2014 年に日本政府は、研究代表者が基調講演を行ったアセアン日本アクティブ・エイジング会議において、「介護」は経験の長い日本がイニシヤチブをとれる領域であるとしたが、まだまだ移動に関する国際発信は立ち遅れている。こうした重要性に鑑み、本研究を特設分野として応募することが適切だと考える。

2. 研究の目的

本研究は、従来の福祉レジーム論では十分議論されてこなかった、福祉レジーム論と移民レジームとの交錯について検討する。そして移民の福祉への取り込みが、高齢者ケアの供給体制に影響を及ぼし、多様化する福祉レジームの根拠となっている点を明らかにする。

アジアの高齢者ケアシステムを概観すると、日本・韓国のように介護保険を導入する国々がある一方で、シンガポール・香港のように外国人家事労働者に依存する国々がある。また台湾のようにケアの社会化(ケアの国民化)を進めつつ外国人労働者に依存するケースや、タイのようにコミュニティケアに外国人を接合する中間形態もある。このように、アジアの福祉レジームは現時点で実に多様であり、今後も単に「家族主義」に収斂するのではなく、多様化が継続される可能性がある。そして、この多様化する高齢者ケア政策の形成に関与しているのが、実は外国人労働者や移民の取り込みなのである。なお、本研究では新たに生じる高齢者ケア供給に関する問題点についても検討したい。

3. 研究の方法

これらの点を検討するにあたり、1. 制度面からのアプローチ、2. 言説面からのアプローチ、3. 政策決定プロセスの検討、4. 制度に対応する実態面からのアプローチ、5. 斡旋過程における人材育成から接近する。対象とする国は、受け入れ国が日本、台湾、シンガポール、タイである。左記の国々は、高齢化の進展度、ケアの社会化の程度、高齢者ケア政策、外国人労働者の人数やその割合等の多様な要素から選択し、多様な状況が検討可能である。

例えば、日本の高齢者ケアは社会化され、外国人労働者はほとんど存在しない。台湾は介護保険導入を控え、社会化傾向にあるが、外国人労働者も多い、シンガポールは家族主義で、再分配を通じたケアもなく外国人労働者が多い。タイは家族/コミュニティによるケアを中心として、外国人労働者も増加傾向にある。送り出し国はフィリピン、インドネシア、ベトナムであり、送り出し政策と人材育成について検討する。

これまで、移民研究と高齢者ケアの双方に跨る領域の研究は少ない。これは研究対象領域が国内に限られる福祉政策と、国際現象としての移民という方法論上の違いや、そもそものテーマの学際性や複合性にある。外国人ケア従事者の実態は、高齢者ケア政策だけを見ても分からないことが多い。というのも、双方で所管が異なるからである。

したがって本研究ではこうした困難を克服すべく、理論、実務面で国際的な業績を持つ移民研究者と高齢者ケア研究者、そして対象国実務者・研究者と協働する学際的・国際的な方法を用いる。研究の流れとして高齢者ケアと移民の重要文献のサーベイを徹底的に実施し、学際性の困難を乗り越えるため、他分野の知見を共有する。これは専門分野をかけ持ちを意味し、ケアと移民の論点を架橋できる研究体制を整える。またサーベイは国際調査/比較の基礎となる。

なお、海外の研究協力者は学術機関、政府、非政府組織から選定している。学術については主に大学ネットワークを用い、政府・非政府組織からは、これまでの調査や会議ですでに協力関係にある専門家を選定している。

本研究は、福祉レジーム論/移民レジーム論において、両者の接合という点でユニークであるだけでなく、政策の観点からも意義のあるものである。

理論的な観点においては、制度分析を通じて多様な家族主義レジームを明らかにすることができる。高齢化と家族構成の変化という家族主義の限界を乗り越えるには、高齢者ケアを社会化(ケアの国民化)へ収斂するだけでなく、外国人ケア従事者を家族に統合してケアを補てんするという、新たな家族主義レジームの動向を提示できる。また、こうした福祉レジームと移民レジームの交錯点での実態把握により、高齢者ケアの国際分業、ケアのために途上国女性が国境を超える移動の女性化、在宅ケア従事者の労働者性の確立の困難、スキルギャップなどの概念の精緻化と問題点を指摘できると考える。

4. 研究成果

高齢化がアジア共通の課題となる中で、域内移動を通じてケアの補填が行われている。高齢化

は高齢者ケアのあり方を1つに収束させているのではなく、そのあり方を多岐化させている。自由主義的な家族主義は外国人家事労働者の雇用を容易にさせ、シンガポール、香港、台湾などの東アジアだけでも100万人近い外国人がケアに従事している。他方、日本は逆に資格要件をクリアするため看護師のリクルートが多いが、すべて施設介護に対応するものである。施設介護は看護師が、在宅は無資格の家事労働者がという大きな構図を見て取れるが、特に在宅においては、必ずしもケアの質を問う受け入れとは言えない。いまだに「家族」がブラックボックス化されているともいえる。また、人口構成が大きく変化中、現在の移動のあり方は持続性が問われるものといってよく、アジア地域における移住労働の標準化や調和化が不在だ。現在の移動は二国間を軸としているため、今後増大を続けるケア需要と従事者の国際移動をどう持続的なものにするか、地域的（マルチラテラル）な調整が必要であるという課題を抱えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計34件)

- 太田貞司(2016)「地域包括ケアシステム」を考える」『ケアマネジメント学』no.14,5-11。
- 太田貞司(2016)「これからの地域包括ケアシステム-市区町村が主体となって進める「新しい総合事業」」『月刊福祉』, vol.7,12-17。
- 太田貞司(2017)「介護職の職能手段の形成とチームリーダー」『京都女子大学生生活福祉科紀要』vol.12,15-27。
- 結城康博(2017)「介護殺人予防策の法制化が急務」『公衆衛生』vol.81,no.2,109-113。
- 明石純一「海外から働き手をいかに招き入れるか」『日本政策金融公庫論集』no.34,87-107。
- 明石純一(2017)「安倍政権の外国人政策」『大原社会問題研究所雑誌』no.700,12-19。
- 大崎千秋(2016)「不適切ケアを判断できる感受性を磨く倫理観の育て方」『日総研 高齢種安心安全ケア「実践と記録」』no.7,17-22。
- ASATO Wako(2017) “Welfare regime and labour migration policy for elderly care: new phase of social development in Taiwan”, *Asia Pacific Journal of Social Work and Development*, vol.27,211-233。
- ASATO Wako et al(2017), “Welfare Regimes, Migration and Demographic Change”, *Exploring Academic Frontiers for a Sustainable Future: Challenges for Japan-ASEAN Research Collaboration*,7-32。
- ASATO Wako, “Ageing Asia and Reconfiguration of International Migration”, *Asian Jana Journal*, no.14,99-106。
- 大崎千秋(2017)「教職実践演習におけるシラバス作成の一考察 - 特別な配慮を必要とする幼児と関わった学生の聞き取りから - 」『名古屋柳城短期大学研究紀要』, vol.39,245-256。
- 大崎千秋(2017)「保育科学生の知的障害児(者)に関する基礎的研究 - A 短期大学の施設実習アンケート調査分析から - 」『名古屋柳城短期大学研究紀要』, vol.39,129-141。
- 太田貞司(2017)「共通基礎課程」導入と介護福祉士の今後 - 「日常生活の営み」支援」『介護福祉学』日本介護福祉学会会, no.24,42-48。
- 太田貞司(2018)「介護福祉実践」事象をめぐる論争: 1990年代後半-2000年代」『京都女子大学生生活福祉科紀要』no.13,1-16。
- 太田貞司(2018)「地域共生社会と介護福祉・職能団体の課題」『介護福祉士』no.23,1-7。
- 明石純一(2018)「現代日本の外国人労働者 - 昨今の政策動向とその含意」『労働調査』, no.569,4-10。
- 結城康博(2018)「介護人材不足と中間管理職の要請力欠如」『週刊社会保障』, no.2990,44-49。
- 結城康博(2018)「社会保険制度における規制緩和の危険性」『収縮経済下の公共政策』。
- 明石純一(2018)「歴史的な外観」『移民政策フロンティア: 日本の歩みと課題を問い直す』, 39-44。
- AKASHI Jyunichi (2018) “Thinking beyond the State”, De La Salle University Publishing House/Sesex Academic Press, *Immigration Policy in Contemporary Japan: The Dilemma Between Control and Coexistence*, 1-31。
- 明石純一(2018)「日本医置ける移民政策のグランドデザインの構築に向けて: 入国管理体制の再検討」『移民政策研究』, no.10.5-12。
- 明石純一(2018)「日本の外国人労働者政策: その継続と変化」『運輸と経済』no.9,20-26。
- AKASHI Jyunichi (2018) “EU-Japan Security Cooperation: Trends and Prospects”, Routledge”, *The EU-Japan Security Dialogue and Migration; a Search for Common Ground*,182-202。
- 明石純一(2019)「日本における外国人人口の同行と外国人政策の新展開」『統計』, 70(1),32-37。
- 明石純一(2019)「2018年入管法改正をめぐっての一考察: 文化的多様性を増す日本社会への含意」『文化・民族・言語の多様性とその学術的研究論文集』no.1,108-1161。
- 明石純一(2019)「平成30年入管法改正をめぐっての一考察: その歴史的意味と「外国人材受け入れのこれから」」『法律のひろば』no,72(4), 32-41。
- 太田貞司(2018)「地域共生社会と介護福祉士・職能団体の課題」日本介護学会『介護福祉士』

no.1,1-7。

太田貞司 (2018)「地域包括支援センター」『日本医師会雑誌特別号(2) 認知症トータルケア』no.147,333-335。

太田貞司 (2019)「男性介護者支援の課題 「介護殺人」検証の必要性 - 」『高齢者虐待防止研究』no.15-1,23-28。

太田貞司 (2019)「介護福祉実践」事象をめぐる論争：1990年代後半-2000年代(続)『京都女子大学生生活福祉科紀要』no.14,7-14。

大崎千秋 (2018)「「人間関係」の議論に必要な外国にルーツがある子どものかかわり方の留意点」『名古屋柳城短期大学研究紀要』, no.40。

安里和晃 (2019)「海外人材は介護人材不足を解消するか」『公衆衛生』vol.83,no.2,医学書院,114-119頁。

安里和晃 (2018)「総論 外国人介護職を取り巻く状況と課題」『コミュニティケア』vol.20, no.11、日本介護協会出版会、51 57頁。

安里和晃 (2019)「ドイツの介護保険制度と

多様な介護人材」『診療研究』vol.546、15-21頁。

〔学会発表〕(計41件)一部省略

安里和晃「外国とかかわりのある家庭の抱える問題とその支援」JST RISTEX プロジェクト「養育者支援によって児童虐待を提言するシステムの構築」, 2017

安里和晃「統合ケアと海外人材の位置づけ：アジア・欧州の事例から」ホームヘルパー中央研修会「海外における訪問介護の実情と日本の将来」, 2018

安里和晃「支援についての考え方 社会統合の視点から」京都大学安里研究室主催「新移民研究ワークショップ：外国にルーツを持つ子どもたちへの支援」, 2018

ASATO Wako, “Current Care Workforce Mobility in Japan and Asia”, World Social Science Forum, Fukuoka September 27, 2018.

安里和晃「超高齢社会とアジア諸国の介護」コムスタカ主催「外国人介護労働を考えるシンポジウム」(招待講演), 2018

安里和晃「福祉レジームの多様化と統合ケア」日本介護福祉学会関東ブロック研修会京都大学文学研究科安里研究室・日本介護福祉士会共催「高齢者ケアはどう変わってきたか：台湾とドイツに見る制度と人材育成」, 2017。

安里和晃「介護の担い手をめぐるグローバルな政策と実態」京都大学主催「京大の知シリーズ 26 国際社会の中の日本 世界との関係・日本の現状 - 」, 2017

安里和晃「アジアにおける介護労働者」移住者と連帯する全国ネットワーク&在日韓国YMCA 主催「連続セミナー第8回」(招待講演), 2017。

安里和晃「開催趣旨」京都大学安里研究室主催「EPA10年を振り返るシンポジウム：インドネシア人の介護は日本人に伝わりますか」, 2017。

ASATO Wako, “Who Cares?Challenges on Cross-Border Movement of Careworkers”, multistakeholder forum on “Investing in Healthy and Aging for Sustainable Growth” organized by the Government of Japan, Government of Vietnam, AFPPD (招待) 2017

ASATO Wako “Human Resource Development of Care Provider in Asia”, 11th Asian Society Against Dementia (ASAD) organized by the Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University (招待講演)、2017。

安里和晃「技能実習制度の介護職種への展開について：他国との比較を踏まえて」第18回日本認知症ケア学会沖縄大会「認知症と共に生きる」(招待講演), 2017。

大崎千秋「海外ヘルパーの同行訪問で見えてきたもの～ドイツを中心に～」日本ホームヘルパー協会中央研修, 2017。

大崎千秋「身体のメカニズムと介護技術(演習を含む)」中国誠和敬養成訓練学院「介護施設の危機管理」, 2018。

大崎千秋「支援する人、支援を受ける人、これからの、介護の現場はどうなっていくのか」自治労連第9回介護労働者のうどい愛知, 2018。

大崎千秋「介護技能実習の現状と課題」日本認知症ケア学会 in 富山, 2017。

太田貞司「日本の地域づくりとその発展」ちゅごく・瀋陽化工大学人文・社会科学院主催国際シンポジウム・基調講演(招待講演), 2018。

AKASHI Jyunichi, “Immigration Policy in Postwar Japan: Historical Developments and Challenges Ahead”, Hokkaido Workshop on Immigration Policy and Border Security in Japan organized by Jean Monnet Network, Comparing and Contrasting EU Border and Migration Policy; Are They Exeplary?, 2018。

明石純一「多文化共生～輸入されなかった多文化主義と日本型」『社会統合』タシケント国立東洋学大学・筑波大学国際シンポジウム「文化の対話と翻訳・翻案」, 基調報告, 2018。

AKASHI Jyunichi “Immigration policy and Career development for Immigrant youth in Japan”, Counseling and Support “Decent Work, Equity and Inclusion: Passwords for the Present and the Future, 2017。

AKASHI Jyunichi, “Towards a more flexible model for inviting migrant workers” APEC Study Center Consortium Conference, 2017。

明石純一「日本の移民・難民政策と平和構築への示唆」国際基督教大学敬和研究所特別シンポジウム「日本におけるマイノリティと平和の課題：学際的対話のアプローチ」, 2018。
明石純一「マイグレーションスタディーズへの誘い—政策と実践への示唆」横浜法学会平成 29 年度第 5 回研究会, 2018。
ASATO Wako, “Current Care Workforce Mobility in Japan and Asia”, World Social Science Forum, Fukuoka, September, 2018。
明石純一, 「日本の「移民政策の転換 「人材」と「人手」ニーズへの対応」, アジア共同体教育講座, 2018。
AKASHI Jyunichi, “The role of citizens’ self-government bodies in the implementation of public control: the experience of Uzbekistan and Japan”, Japan in Motion: a multicultural experiment in contemporary Japanese society, Uzbek-Japanese Round Table, 2018。
明石純一「難民保護とその実質化の過程—日本の第三国定住難民の受け入れを事例として」, 日本国債政治学会部会報告, 2018。
明石純一「外国人の抱える課題」, SDGs と日本：誰も取り残さないために何をすべきか「日本の人間の安全保障」指標発表記念シンポジウム, 2018。
明石純一, 「急展開する日本の「外国人材」受入政策の動向と社会的対応の諸課題」, 立教大学福祉研究所, 2018。
明石純一「外国人と共に暮らすということは～課題と入管法について」『よこはま国際フォーラム 2019』, 2019。
明石純一「2018 冬の入管法改正～地域社会と多文化共生にとっての示唆」, シンポジウム「多文化共生」, 2019。
明石純一「2018 年入管法改正をめぐる一考察」, 「世界正義理念の再構築による移民難民政策の規範的指針の研究」研究会, 2018。
明石純一「外国人労働者政策転換の意義と特定技能創設が及ぼす労働市場への影響」, お特定技能施行と外国人雇用シンポジウム, 2019。
明石純一「2018 年入管法改正をめぐる一考察：文化的多様性を増す日本社会への含意」, 文化・民族・言語の多様性とその学術的研究, 2019。
TSUJIMOTO Toshiko, “The Onward Migration of Filipino Migrant Workers from East Asia to Canada: Exploring the Nexus of Global Labor Mobility and Social Reproduction”, The Inaugural Congress of East Asian Sociological Association(東アジア社会学第一階創立記念大会), 2019。
大崎千秋「技能実習生に介護を伝えるために～言葉の問題を諸外国を含む先行事例から考える～」, 全国教職員研究会, 2018。
安里和晃, 「東アジアにおける福祉レジームとシチズンシップの展開」千葉大学シンポジウム「グローバルな福祉社会の構想力～東アジアの介護・ジェンダー・移民」2018 年 12 月 16 日。
ASATO Wako, “Japan in Transition from Homogeneity to Diversity: Does Diversity Include Foreigners”, Conference on Japanese Studies Philippines, Feb. 1, 2019。
〔図書〕(計 10 件)
結城康博ほか(2016)『これで福祉と就労支援がわかる』書籍工房早山, 165。
明石純一(2016)『現代日本の入管法制の展開』大久保史郎ほか『人の国際移動と現代日本の法』, 日本評論社, 329 - 343, 481。
明石純一(2016)『南アジアと人の越境』西原和久ほか『現代人の国際社会学・入門』有斐閣, 128 - 145, 311。
ASATO Wako(2016), “Welfare Regimes, Migration and Demographic Change”, KONO Yasuyuki ed. *Exploring Academic Frontiers for a Sustainable Future: Challenges for Japan-ASEAN Research Collaboration*, 26。
安里和晃(2017)『台湾における外国人労働者政策と高齢者介護政策 - 国境を超えるケアの制度的整合性』松岡悦子編『子どもを産む・家族をつくる人類学オルタナティブへの誘い』勉誠出版, 234 - 262, 309。
安里和晃(2018)『国際移動と親密圏：ケア・結婚・セックス』京都大学出版会, 312。
明石純一(2017)『変容する国際移住のリアリティー「編集モード」の社会学』, ハーベスト社, 327。
明石純一, 大久保史郎ほか編(2017)『人の国際移動と現代日本の法』日本評論社, 496。
結城康博(2018)『突然はじまる！親の介護でパニックになる前に読む本』, 講談社, 210。
太田貞司(2018)『災害に強い地域福祉』, 東京都社会福祉協議会, 249。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年：
国内外の別：
取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：
〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：太田 貞司

ローマ字氏名：Ota Teiji

所属研究機関名：京都女子大学

部局名：家政学部生活福祉学科

職名：教授

研究者番号（8桁）：90223833

研究分担者氏名：大崎 千秋

ローマ字氏名：Osaki Chiaki

所属研究機関名：名古屋柳城短期大学

部局名：保育科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：80310598

研究分担者氏名：明石 純一

ローマ字氏名：Akashi Junichi

所属研究機関名：筑波大学

部局名：人文社会科学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30400617

研究分担者氏名：結城 康博

ローマ字氏名：Yuuki Yasuhiro

所属研究機関名：淑徳大学

部局名：総合福祉学部社会福祉学科

職名：教授

研究者番号（8桁）：10458622

研究分担者氏名：辻本 登志子

ローマ字氏名：Tsujimoto Toshiko

所属研究機関名：青山学院女子短期大学

部局名：現代教養学科国際専攻

職名：助教

研究者番号（8桁）：50749851

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。